

氏 名 鈴木 堅弘

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1534 号

学位授与の日付 平成24年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 近世春画・春本の図像研究—その背景表現への考察—

論文審査委員 主 査 教授 稲賀 繁美
教授 井上 章一
教授 早川 聞多
教授 Andrew Gerstle University of London
理事 白倉 敬彦 国際浮世絵学会

論文内容の要旨

本研究は、江戸時代の春画を「性交表現」のみから捉えるのではなく、その周辺に描かれた「背景表現」(図像・詞書・台詞等)により多く着目する。そのことにより、それら「背景表現」に隠された意味やモチーフを読み解き、またそこから画中の人物や物事が織りなす春画における物語性や趣向性の特色を解き明かす。その際に、春画のみを研究対象とするのではなく、文学史や歴史学、風俗史などの諸学術分野の成果を踏まえつつ、春画の表現を通じて日本の江戸時代における社会状況や生活文化までも浮き上がらせることを目的とする。なお、本研究はそれら諸学術分野からのアプローチを加えつつも、あくまでも「絵画・図像」という学問的立場から江戸時代の春画を考察することを前提とする。

以下、本研究の各章の内容を説明する。

第1章では、国際日本文化研究センターに所蔵されている春画・艶本コレクションの3500画図(一次資料)を分析対象とし、そこに描かれた図像を量的に数値化し、その描写実態を統計的に把握することを試みた。その方法として、一枚の春画から「性描写の有無」、「性交者の性別」、「性交者の立場」などの図像情報をカテゴリー別に抜き出し、その数を数えることで、春画に描かれた人物(立場)、性別、年齢、場所などの割合を算出した。これまでの春画研究においては、こうした図像の統計的な把握が行われておらず、そのため春画は遊女(娼婦)を描く絵画として扱われたり、また男色画や手淫画も数多く描かれていると考えられてきた。そこで、こうした図像を統計的に把握することにより、江戸時代の春画の特色を正確に捉え、その描写実態を明らかにした。

第2章では、浮世絵春画における図像の借用表現に着目し、おもに〈粉本主義の伝統〉、〈模倣の「趣向」化〉、〈出版元の依頼〉の三点から、春画に模倣的表現が描かれた理由を解明した。また本章の考察にあたり、浮世絵春画における図像が〈唐本の挿絵〉、〈草子本の挿絵〉、〈浮世絵〉などの他の表現ジャンルの表象から借用されていることを検証している。なかでもとくに重要視したのが〈春画〉と〈浮世草子の挿絵〉の関連性である。双方の図像比較は従来の春画研究においてもほとんど試みられておらず、本章では春画が同時代の文芸表現に影響を受けつつも、その変奏表現を描くという創作の実態を明らかにしている。

第3章では、春画に描かれた〈張形〉に着目し、同時代の性器をめぐる習俗や信仰との関連の中でこうした図像が描かれたことを考察する。とくに春画の張形の表象は、従来の研究において、女性が用いる淫具として認識されてきた。しかし本章では、春画に描かれた張形を、そのような性的視座から捉えるのではなく、むしろ「張形を海に流した習俗」や「男根の縁起物を嫁に供えた婚礼習慣」など、庶民の世相習慣や信仰心意に則した視座から捉えなおすことを目的とする。

第4章では、江戸時代の春画として最も有名な北斎の『蛸と海女』を取り上げ、この画のなかに同時代の歌舞伎、浄瑠璃、戯作などに用いられた「世界」と「趣向」の表現構造が含まれていることを論じる。またこのことで、一枚の春画のなかに、古代より連綿と続く海女の珠取伝承や、江戸時代の巷間に流布した奇談・怪談などの「物語性」が含まれていることを解き明かしている。

第5章では、江戸時代の春画に描かれた「衣装とその模様」に着目し、春画に華麗な衣

装が多く描かれた理由について、「風流」を母体とした「かざり」の表現意識、「雛形本」の模様との類似性、「見立て」としての模様、の三点の視座から考察している。これらの視座を重ね合わせることで、江戸時代の春画を「日本のかざり文化」の内側から捉えなおし、江戸の飾る文化と春画とのつながりを示す。

そして終章では、春画の「背景表現」の有無を江戸期と明治期に跨いで比較検討することにより、春画というものが明治以降に日本の近代化のなかで「ポルノグラフィ」(猥褻画)として認識されていくプロセスを解明する。なかでも重要視したのは、明治期に美術画壇・マスコミを中心に繰り広げられた「西欧裸体画論争」がその後の春画認識に与えた影響である。それら裸体画論争は、当時のマスコミを通じて一般大衆を巻き込みながら展開され、そのなかで春画は、新来の「裸体画」を芸術表現として世相にひろく浸透させるために、相対的に「猥褻」の彼岸へと追いやられていった。終章では、その春画の認識転換を明治期の新聞や美術雑誌に記された「藝術」と「猥褻」をめぐる論争記事を繙くことで解き明かしていく。またその過程で、江戸時代の春画を「性交表現」と「背景表現」に分けて理論的に把握し、双方の表現が互いに協働・離反することで「笑い」や「見立て」を演出する機能的役割を読み解き、今日のわれわれが抱く春画認識とは異なる江戸人の春画の見方を復元する。

以上、これら各章の論点を踏まえて本研究では、江戸人が春画に抱いてきた歴史的認識を復元すると共に、春画が「ポルノグラフィ」や「猥褻画」として理解される今日の認識を根底から解体し、春画に関する新たな見方を再構築する。

博士論文の審査結果の要旨

本論は、長らくタブー視されてきた春画、なかでも江戸時代の浮世絵春画を研究対象としたものである。本研究の方法の特色は、まず浮世絵春画を数多く実見して画面の徹底分析を行い、その成果から春画を「性交表現」のみに注目するのではなく、その周辺に描かれた「背景表現」(図像・詞書・台詞等)に着目することによって、それらに託された意味を読み解き、そこから春画における多彩な趣向性や物語性を解き明かすところにある。また、その際に春画の美術史的意味だけでなく、文学史・風俗史・文化史などの諸分野の成果を踏まえつつ、春画表現を通じて、江戸時代における社会風俗や文化状況を浮き上がらせることを目的としている。

第1章では、国際日本文化研究センター所蔵の春画・艶本コレクションの中から、江戸時代各期の絵師の作品を均等に抽出し、その春画3500図を分析対象として、各図に描かれた図像要素を量的に数値化し、江戸時代の春画の描写実態を統計的に把握することを試みている。こうした図像の統計分析により、江戸時代の春画描写の実態を明らかにしようとしている。

第2章では、第1章の分析によって見出された浮世絵春画における図像の借用表現に着目し、おもに〈粉本主義の伝統〉、〈模倣の趣向化〉、〈出版元の意向〉の三点から、春画に多い模倣的表現の意味を解明している。その結果、浮世絵春画には〈唐本の挿絵〉、〈浮世草子本の挿絵〉、〈浮世絵〉の表象から数多くの借用がなされていることを検証している。そして春画が同時代の多彩な文芸美術表現の影響を受けつつ、その変奏表現を描くという創作の実態を明らかにしている。

第3章では、春画にしばしば描き込まれている「張形」に着目する。「張形」は従来女性の用いる性具としてのみ認識されてきたが、それらが同時代の性器をめぐる習俗や信仰との関連の中で描かれていることを見出し、春画の中の「張形」を民間信仰との関連のうちに捉えなおしている。

第4章では、江戸時代の春画として海外で最も有名な北斎の『蛸と海女』を取り上げ、この画像の中には同時代の歌舞伎、浄瑠璃、戯作などに用いられた「世界」と「趣向」の表現構造が含まれていることを解明し、一枚の春画の中に、古代から連綿と続く「海女の珠取伝承」や、江戸時代の巷間に流布した奇談・怪談などの「物語性」が多重に含まれていることを解き明かしている。

第5章では、浮世絵春画に描かれた多彩な「衣装とその模様」に着目し、春画に華麗な衣装が多く描かれた理由について、「風流」を母体とした「かざり」の表現意識、「雛形本」の模様と借用、衣装紋様の「見立て」としての意味といった三点の視座から考察し、江戸時代の春画を「日本のかざり文化」から捉えなおしている。

終章では、春画の「背景表現」について江戸時代と明治期の春画を比較するとともに、明治期の美術画壇・マスコミにおいて繰り広げられた「西欧裸体画論争」を追跡することにより、春画が明治以降の西洋の価値観の導入の中で「ポルノグラフィ」(猥褻画)として認識されていくプロセスを解明している。またその解明の過程で、江戸時代の春画を「性交表現」と「背景表現」に分けて見ることにより、双方が互いに協働することによって「笑い」や「見立て」といった多彩な演出が施されている表現を読み解き、そこに今日の春画認識とは異なる江戸人の春画の見方を想定している。

本論文の「テーマ」は春画を対象としながら、他の文芸・出版分野との通底性を的確に立証し、その「方法論」も、近代的な通念にそった「春画」観から研究を解放しようとする、明確な意識によって統御されている。しかし、第1章の数値分析はあくまでも暫定的かつ一次的な基礎作業であり、今後明確なテーマに沿って、さらに統計学的精度を洗練してゆく必要がある。また最終章の明治以降にすすむ春画の衰退の仮説は論証が性急であり、

出版史、風俗史、文化史への周到的な目配りが望まれる。

また「先行研究」の参照については、春画・日本美術史に限らず、本論に沿って文学・社会学・民俗学など多方面に目を配っており、学際的な研究方法を意欲的に目指している。ただ特に浮世絵や春画に関する欧米の最新の論文への目配りがやや弱い。

以上のようにいくつかの問題点と改善の余地が指摘できるものの、本論文は、以下の成果をあげたものと認定できる。すなわち（１）先行研究に依拠しつつも、それを超える網羅的な分析作業により「春画の背景表現」という研究分野を明確に開拓したこと。（２）明治２０年代以降の西洋化された倫理観による春画蔑視とは異なり、江戸人が性的な絵画表現に対して、享受的かつ多様な表現方法と鑑賞態度を有していたことを具体的に立証した。そしてこの分野が今後の日本研究にとってさらに貴重な研究領域となることが、本論文を通して十分に示唆された。（３）本論文によって示された筆者の実証的研究能力は十分に高いものと評価され、申請者が今後も研究方法の改善に努め、個別の研究テーマ設定をさらに深めてゆくことが期待される。

以上から本論文が、春画研究ひいては日本研究において新しい分野を開く可能性を宿した研究であることを、審査員は全員一致で確認し学位授与に値すると判断した。